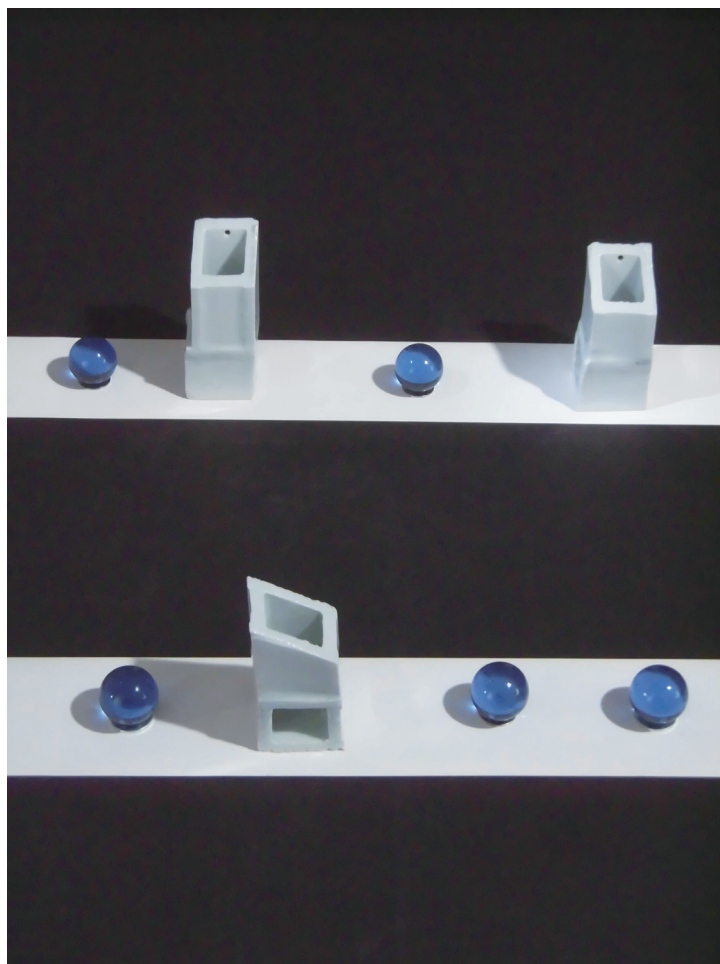


アート・ギャラリー

白磁
=ビー玉=

石田成昭



奈野653 高10cm

—ビー玉—

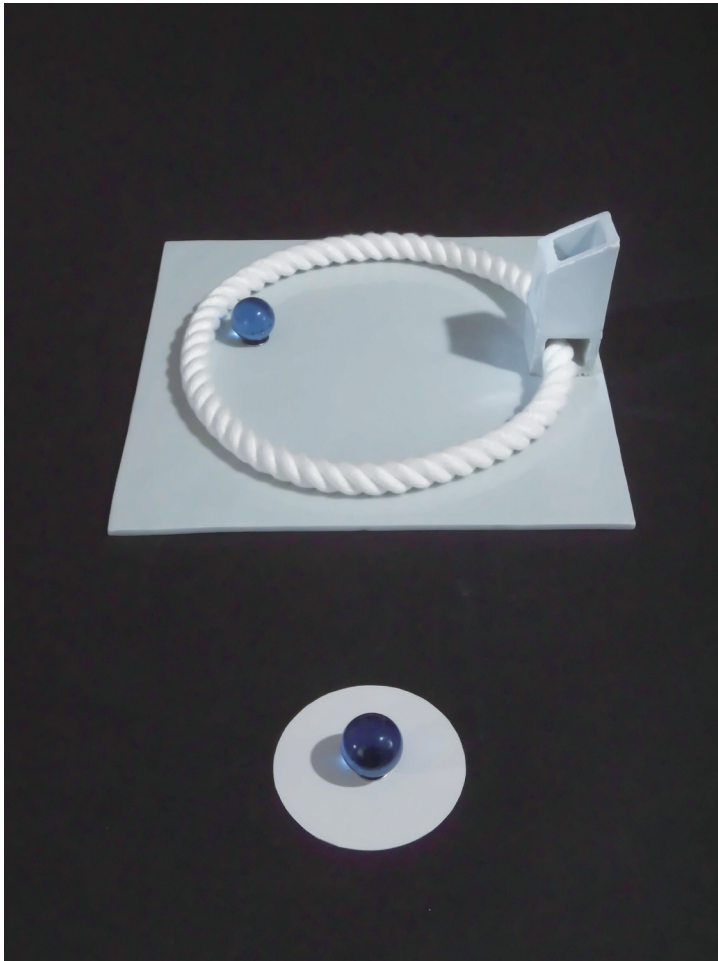
白磁と異素材（金属、木、ワイヤー、ガラス、紙、赤糸、クレモナロープ）の融合をテーマに制作しているが、今回ビー玉（ガラス玉）を使ってみた。

子供の頃、近所の友人と時の過ぎるのも忘れビー玉遊びに熱中していた事を思い出す。赤や黄色の模様の入ったビー玉は美しく私には宝物だった。遊びのルールはどのようなものだったか記憶は定かではないが、まだ戦後間もない頃で、家の前の道路は舗装されておらず、釘の頭で穴や溝を掘って遊んでいた事は良く覚えていてる。物の本によると遙かエジプト時代からビー玉はあったという。80歳近くにもなった私が又ビー玉遊びをするのも不思議な気がするが、ものづくりの原点は子供の頃の遊びにあると思っている。

さて今回使用したビー玉は透明で色は青、直径30ミリ、人間の眼球が平均25ミリと云うからほぼ同じぐらいの大きさだ。丁度奈野白磁に合う寸法である。重さも約30グラムあり、そこそこの重しとなり具合がよい。ガラス玉を白い紙の上に置きライトを当てると美しいブルーの影が出来る。

眼球と云えば仏像の玉眼を思い浮かべる。それはレンズ状の水晶板の裏に金、銀、朱等で縁取りした黒い瞳を描き、そこに和紙や綿花を当てて白目を造り、仏像の眼にはめ込んだものだ。これは鎌倉時代に普及した作眼方法で、それまでに無い革新的なものだったと云う。このアイデアを出した仏師は誰だったかは知らないが、深く敬意を表したい。柔らかな木肌に硬質なガラスの眼はよりリアルな人間像に近づき、祈りをささげる人々に一層の親近感と安らぎを与えたに違いない。何時だったか胸像彫刻で著名な木彫家・舟越桂氏の制作風景を映像で見る機会があった。楠の材で出来た人頭を前後2つに割り、脳内を掻き出し目を彫り抜き、大理石を嵌めこむシーンに、なるほどと制作方法に感心した覚えがある。舟越作品の魅力はまさにこの目にあり異素材の取り合わせの好例といえる。異なる素材がお互いを引き立てあい、全く違った雰囲気のを造り上げる事が出来れば、これぞ造形の醍醐味と云えよう。玉眼は私の目指す異素材の融合の良きお手本である。画竜点睛の故事に準え奈野白磁にビー玉を入れ置き候

白磁の 眼光青し ガラス玉
輝き給へ 千代に八千代に



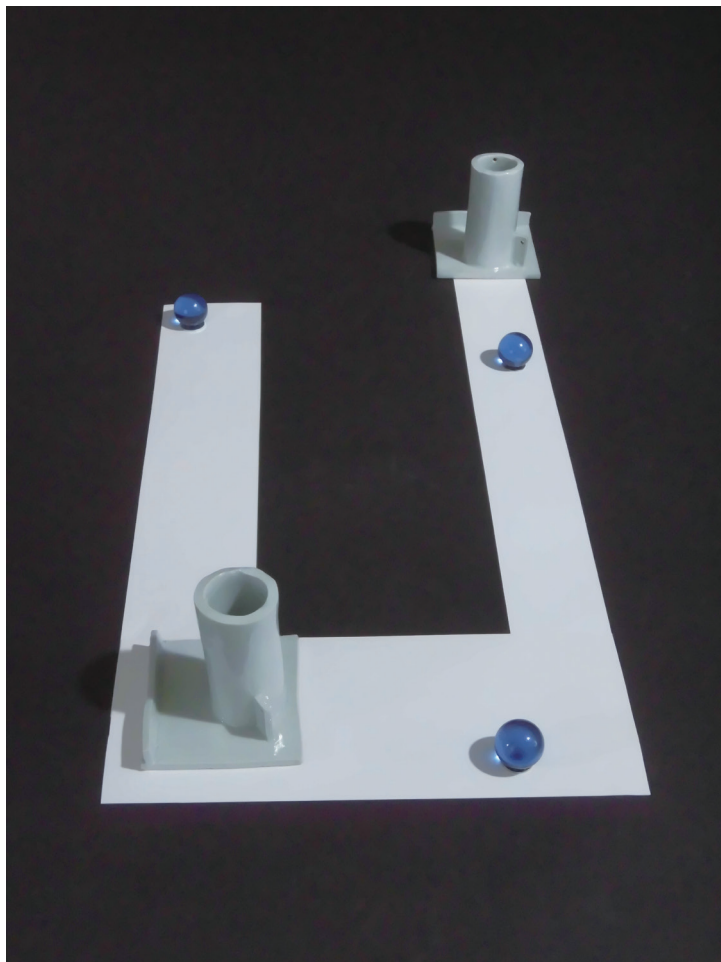
奈野653 高10cm



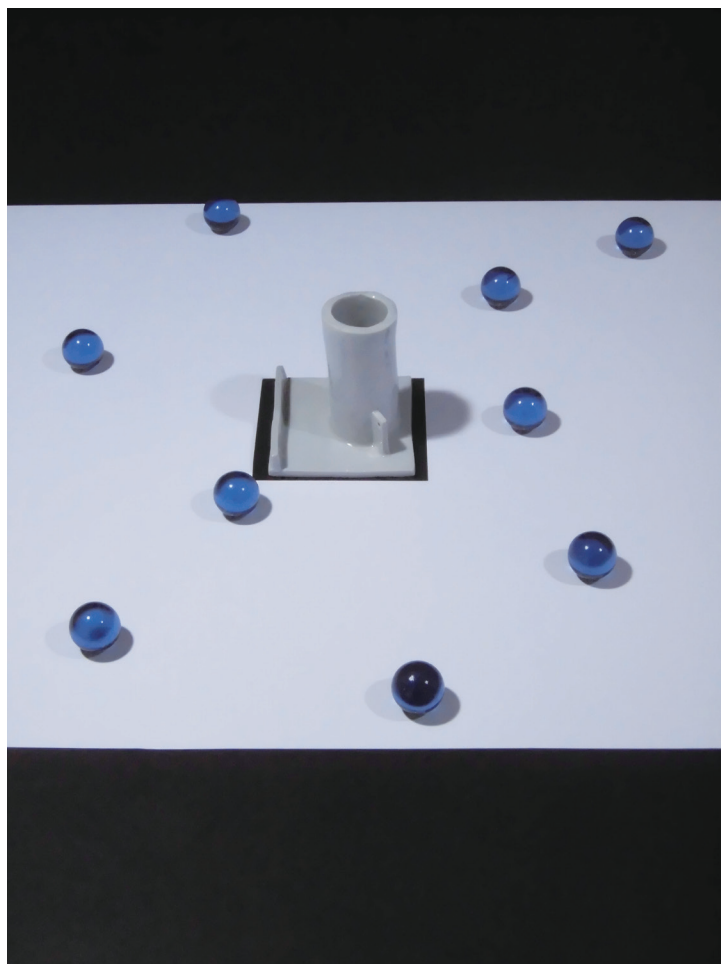
奈野 6 5 4 高 8cm



奈野 6 5 4 高 8cm



奈野 6 5 5 高 10cm



奈野 6 5 5 高 10cm



奈野 6 5 6 高 9cm



奈野 6 5 6 高 9cm